

山間地域におけるグリーンツーリズムと世界遺産観光の持続可能性

— 熊野古道(小辺路)の通る奈良県十津川村神納川区の事例から —

河 本 大 地 奈良教育大学社会科教育講座 (地理学)
劉 丹 奈良教育大学大学院在学
馬 鵬 飛 奈良教育大学大学院在学

Sustainability of Rural Tourism and World Heritage Tourism in Mountainous Areas:

A case study in Kannogawa Area of Totsukawa Village where has Kumano-Kodo Kohechi

Daichi KOHMOTO

(Department of Geography, Nara University of Education)

Dan LIU

(Graduate School of Education, Nara University of Education)

Pengfei MA

(Graduate School of Education, Nara University of Education)

Abstract

The aim of this study is to examine sustainability of rural tourism and world heritage tourism in mountainous areas. An empirical case study was conducted in Kannogawa Ward of Totsukawa Village, located along the Kumano-Kodo Kohechi Pilgrimage Route designated as a UNESCO World Heritage site in 2004. Since then, Kohechi has got some tourists. However, there were almost no accommodation facilities in Kannogawa Ward. Meanwhile, “Children rural mountain fishing village exchange project” which was one of measures to promote rural tourism was introduced by national government, for the fifth year grade pupils at elementary schools. More than 10 farmers in Kannogawa began accepting children from 2008. However, due to the aging of the farmers, the project sorting of promotion measures in national government, and a disaster caused by typhoon in 2011, only 2 farm inns and a cottage are currently maintained. Due to the promotional activities to foreign people conducted by Tanabe City Kumano Tourism Bureau, number of visitors who walk Kohechi has increased, although visits by children and families aimed at rural experiences have almost disappeared. Factors of continuing the management of 2 farm inns are that there are multiple members of the family who run the business, they are relatively healthy, and there are other sources of income, moreover, their passion and pleasure to interact with tourists are high. The results show that, although socioeconomic situation is severe in the study area, the promotion of rural tourism made existence of accommodation facilities that can respond to increase the number of World Heritage tourists, regional visualization, residents’ understanding of tourists, local food materials, local and domestic fans at home and abroad possible. Rural tourism is a key not only for sustaining the pilgrimage route designated as World Heritage but for sustaining the rural communities located along the route in remote rural areas.

キーワード：グリーンツーリズム、
紀伊半島の霊場と参詣道、十津川村

Key Words : Rural tourism, Sacred Sites and Pilgrimage
Routes in the Kii Mountain Range,
Totsukawa Village

1. はじめに

本研究の目的は、人口減少や高齢化の著しい遠隔の山間地域における、グリーンツーリズムと世界遺産観光の持続可能性を整理・解明することである。

日本では「観光立国」の実現が重要な政策課題とされている。観光振興には、地域固有の観光資源を活用した魅力ある観光地づくりが不可欠である。本稿で扱うグリーンツーリズムおよびユネスコ世界遺産関連の観光は、これに大きく関わる。

日本におけるグリーンツーリズムは、1992年に農林水産省が、農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動として推進を開始したものである。その背景には、1980年代後半のバブル崩壊と大型リゾート開発構想の破綻の影響で、農業・農村の衰退の傾向が顕著になってきたことがある。また、経済のグローバル化の下で、中山間地域における過疎化、高齢化や耕作放棄地の増加等の課題が顕出してきたことも重要な背景である。

グリーンツーリズムはツーリズム(観光)の一形態であるが、栗栖(2011)は、「観光といってもかつてのリゾート開発のような、外部資本中心の大規模な開発を伴うものではなく、農山漁村が持つ文化や自然環境等を活かすことが重要で、さらに特別な資源を持った農山漁村だけではなく、一般的な農山漁村においても展開できる観光といった点にグリーン・ツーリズムの意義がある」と述べている。

主要なグリーンツーリズム推進施策のひとつとして、「都市農村交流」を推進するための農林漁家民宿の開業・経営が挙げられる。2008年度から、こうした民宿等を活かした「子ども農山漁村交流プロジェクト」(愛称：ふるさと子ども夢学校)が、総務省・文部科学省・農林水産省の連携により、小学校5年生の児童を対象に進められた。農山漁村での“ふるさと生活体験(宿泊体験)”を推進するこのプロジェクトは、全国約2万3千校の小学校(1学年規模120万人を目標)で体験活動を展開することを目指し、小学校における農林漁業体験活動や宿泊体験、地域住民との交流を通じて、子どもたちの生きる力を育むとともに、農山漁村における宿泊体験の受入体制の整備、地域の活力を創造する取り組みのサポートを行おうとしていた(井上, 2011)。

とはいえ、「都市農村交流」を旨としてきたグリーン

ツーリズムには、都市部等からの来訪者に対する農村地域住民の「もてなし疲れ」や、補助金に依存した体験交流施設の建設・維持や各種取り組み、地域内における世代間交流の視点の不足、国際対応の欠如、農林水産省以外の省庁の推進するツーリズムとの連携の欠如など、多くの課題も指摘されてきた(河本, 2014)。

一方、世界遺産は、1972年のユネスコ総会で採決された世界遺産条約に基づいて世界遺産リストに登録された物件であり、その目的は、地球にある素晴らしい自然や文化を、国や民族の区別なく、全地球人のものとして守っていくところにある(服藤, 2005)。日本からは、1992年の世界遺産条約締結以降、2018年1月現在までに文化遺産14件、自然遺産4件、計18件の世界遺産が登録されている。

世界遺産は、日本において広く浸透し、ブランドとして確固たる存在感を示している。世界遺産に関するテレビ番組の制作や出版物の発行、世界遺産を巡る旅行商品の造成が活発に行われている。こうした中、地域の文化・自然資源を世界遺産に登録することによって内外の認知度やブランド価値を高め、国内のみならず国外からも観光客を誘致しようとする運動が活発化している。それらは主に観光振興を通じた地域経済社会の活性化を図ることをねらいとしている(新井, 2008)。特に近年は、インバウンドツーリズム(訪日外国人の観光)の興隆もあって、さらにそのブランド力や集客力に注目が集まっている。

2. 研究対象地域の概要

本稿では、都市部から離れた山間地域におけるグリーンツーリズムおよび世界遺産観光に注目する。研究対象地域は、熊野古道(熊野参詣道)のひとつである小辺路(こへち)が通る、奈良県吉野郡十津川村の神納川区(かんのがわく)である。

十津川村は奈良県の最南端にあり、和歌山県の田辺市・新宮市・北山村、三重県の熊野市と隣接している。紀伊半島のほぼ中央に位置する。面積は672.38km²で、北方領土を除けば日本最大の村である。森林が面積の96%を占め、これを活用した林業が盛んにおこなわれてきた。また、豊かな自然や温泉、文化遺産に恵まれ、多くの観光客が訪れる。



図1 研究対象地域
地理院地図を用いて作成。



図2 世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の概要
奈良県立十津川高等学校のウェブサイトより転載。

十津川村では、1889年に大水害が発生した。豪雨によって土砂崩れ、家屋の全壊、田畑の浸水・埋没・消失などが起こり、168名が死亡した。その後、約2600人が新たな生活地を求めて北海道に移住し、新十津川町が生まれた。現在でも、十津川村と新十津川町は同じ村章、町章を使用しており、小中学生の交流研修をはじめとする住民どうしの交流も続いている。

また、2011年には台風12号による紀伊半島大水害が発生し、十津川村は全壊18棟、半壊30棟、床下浸水14棟、死者6名、行方不明者6名、重傷者3名という甚大な被害に見舞われた(十津川村、2014)。

本研究の対象とする神納川区は、十津川村を構成する7区のひとつで、5つの大字(内野、山天、五百瀬、杉清、三浦)からなる。同村の北西部に位置する(図1)。同村のなかでも過疎化・高齢化が著しい。同区を学区区とする五百瀬(いもせ)小学校は2006年に上野地小学校に統合されて閉校し、その上野地小学校も二村小学校・三村小学校と統合されて2010年に十津川第一小学校が三村小学校敷地に開校し、区内には現在、小中学生が皆無である。33世帯67人(2017年4月1日現在)の大半が高齢者であり、地域社会の維持が困難になってきている。

ここを通る小辺路は、高野山(和歌山県高野町)から熊野本宮大社(和歌山県田辺市)へと至る徒歩道で、大半が自動車の通行ができない山道である(図2)。小辺路を歩く者は通常、高野山を出て奈良県野迫川村で1泊し、伯母子峠を越えて十津川村の神納川区で1泊し、三浦峠を越えて十津川温泉で1泊し、果無峠を越えて熊野本宮大社に到達する。熊野古道のなかでも難易度の高い険しい道であるが、大阪・京都方面から熊野三山に参詣する目的で頻繁に使われていた。また、地元にとっては幹線的機能をもつ生活道でもあった。高年齢層には、峠を挟んだ婚姻関係も多くみられる。

小辺路は、2004年7月、「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産のひとつとしてユネスコの世界文化遺産に登録されている。「紀伊山地の霊場と参詣道」は、スペインの「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」に次いで世界2例目の「道」の世界遺産となった。「紀伊山地の霊場と参詣道」は、吉野・大峯、熊野三山、高野山という三箇所(三箇所)の霊場とそれをつなぐ参詣道からなっている。登録資産の面積は、吉野・大峯が44.8ha、熊野三山が94.2ha、高野山が63.1ha、参詣道が293.2ha(307.6km)の合計495.3haである(藤代、2012)。

3. 研究方法

研究方法は5つからなる。第一は、田辺市熊野ツーリズムビューローの動向を知ることである。同ビューローは、2010年5月に外国からの個人旅行者にも対応できる

着地型旅行業を開始し、和歌山県田辺市のみならず世界遺産「紀伊半島の霊場と参詣道」の全構成資産や関連地域のインバウンドツーリズムに大きな影響をもたらしており、無視できない存在となっている。

第二は、神納川区にある宿泊施設2軒(農家民宿「山本」および農家民宿「政所」)の2015年から2017年の宿帳(宿泊者名簿)から、宿泊者の出発地および宿泊日のデータを得ることである。

第三は、宿泊施設経営者や地域住民から、同区におけるツーリズムの経緯や宿泊者の行動、経営上の悩みなどを聞き取ることである。

第四は、十津川村が毎月出している「村報十津川」の記事内容を分析することである。

第五に、以上をふまえた成果報告会を現地で開催し、住民等と意見交換をおこなった。その成果も記述に反映させている。

4. 田辺市熊野ツーリズムビューローを通じた熊野古道(小辺路)をめぐるツーリズムの展開

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」における観光者の増加は、一般財団法人田辺市熊野ツーリズムビューローと深い関わりがある。

和歌山県の面積の約4分の1を占める田辺市には、世界遺産・熊野古道のすべての道の集結点と熊野本宮大社がある。田辺市熊野ツーリズムビューローは、2005年5月の市町村合併を受け、2006年4月に田辺市内の5つの観光協会(田辺・龍神・大塔・中辺路・熊野本宮)が構成団体となり設立された。設立からの4年間は、田辺市全域と周辺市町村を含めた広域的視野に立った質の高い観光情報の発信と、受入れ地のレベルアップを主な業務とし、「世界に開かれた持続可能な質の高い観光地」を目指した取り組みが行われてきた(多田、2011)。

同ビューローは、2010年5月、外国からの個人旅行者にも対応できる着地型旅行業を開始した。このインバウンド対応に関しては、主に4つの取り組みが行われてきた。

第一に、「外国人観光客を呼ぶためには外国人の感性が必要だ」と考え、まず英語圏の外国人を国際観光推進員として雇用し、外国人旅行者の動きやニーズの実態を知るために統計調査の分析やアンケートを行った。

第二に、海外への情報発信についてはウェブサイトを中心にを行い、ビューローで作成するパンフレットやマップ、ポスターなどすべてにおいて日英併記を基準としている。現在のビューローは英語、フランス語、スペイン語、中国語、韓国語の5言語に対応したページを公開している。翻訳については、歴史的人物の固有名詞や元号・宗教的な概念や習俗を日本の歴史や文化に知識のない外国人にも理解できるように工夫している。

第三に、英語が話せない地元の観光業者にとって外国人の受け入れは難しいため、「笑顔があれば英語が話せなくても大丈夫！指差しツールで外国人とコミュニケーション」をテーマに業種別にカリキュラムを変えてきめ細やかな研修を行った。また、グルメマップを作成し、飲食店23店舗に英語版メニューを設置した。観光地等の看板、周辺マップ、ホテル案内、バス時刻表などに英語訳を付している。

第四に、2008年10月から、熊野古道と同じく巡礼道としての世界遺産があるサンティアゴ・デ・コンポステラ市観光局と世界遺産の巡礼道としてコラボレーションすることで情報発信力を高め、共通のパンフレットやウェブサイト等の作成に取り組んでいる。

こうした取り組みの結果、田辺市熊野ツーリズムビューロー社員総会の事業報告によると、2016年度(平成28年度)の旅行事業売上高は、前年度1.5倍増の3億705万3千円で、旅行事業の取扱人数も初めて1万人を超え1万1,442人になり、うち海外客が1.5倍増の7,744人、国内客が1.3倍増の3,698人となり、国内外ともに取扱人数が増加した(図3)。なお、同年度において海外客が占める割合は68%となっている。ビューローの予約サイトを利用した外国人客は6,574人で、前年度の1.4倍であった。海外旅行会社経由の取扱いは1,170人で、1.7倍に増えた。

利用者数及び旅行事業売上高が増加した要因について同ビューローは、①海外からの予約システム利用者の増加、②海外旅行会社経由の取扱いの増加、③スポーツ合宿の取扱いの本格化とまとめている。①と②については、海外の旅行ガイドブックに取り上げられたり、現地を訪れた客がインターネットを通じ、魅力を発信した

りしている影響も考えられる。スポーツ合宿での利用は国内客が中心で1,611人ある。田辺市や南紀エリアスポーツ合宿誘致推進協議会と連携を強化し、誘致を始めた。

同ビューローの海外発信の影響は、神納川区まで及んでいる。世界遺産のひとつである小辺路は同ビューローのウェブサイトの世界の人々に、「熊野参詣道の中でも最も険しい道である」と紹介されている。

このウェブサイトでは、十津川村の宿泊施設の一部について予約することもできる。神納川区の農家民宿「政所」および農家民宿「山本」等も予約できる。宿泊プラン、アクセス、部屋施設、食事が詳しく紹介されている。宿泊者のレビューも読むことができる。英語でも、日本語での紹介と同様の内容で詳しく紹介されている。

5. 神納川区におけるツーリズムの展開

5.1. 子ども農山漁村交流プロジェクトの導入

神納川区では、2004年7月に「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界文化遺産に登録されても、観光者の急増はなかった。しかし世界遺産登録を機に、小辺路を歩く外国人が少数ながら見られるようになった。当時は突如現れた「外人」の姿に驚く住民が多かったという。

これとは別に、神納川区の住民有志はグリーンツーリズムの事業を開始した。2008年8月の『村報十津川』には、次のように記されている。「村では、神納川地区で地域住民と協働し、廃校となった五百瀬小学校舎などを利用して宿泊・交流体験を通じた地域活性化に取り組む『子ども農山漁村交流プロジェクト』を予定しています。(中略)この子ども農山漁村交流プロジェクトは、総務省、農林水産省、文部科学省、村が連携して、他府県の

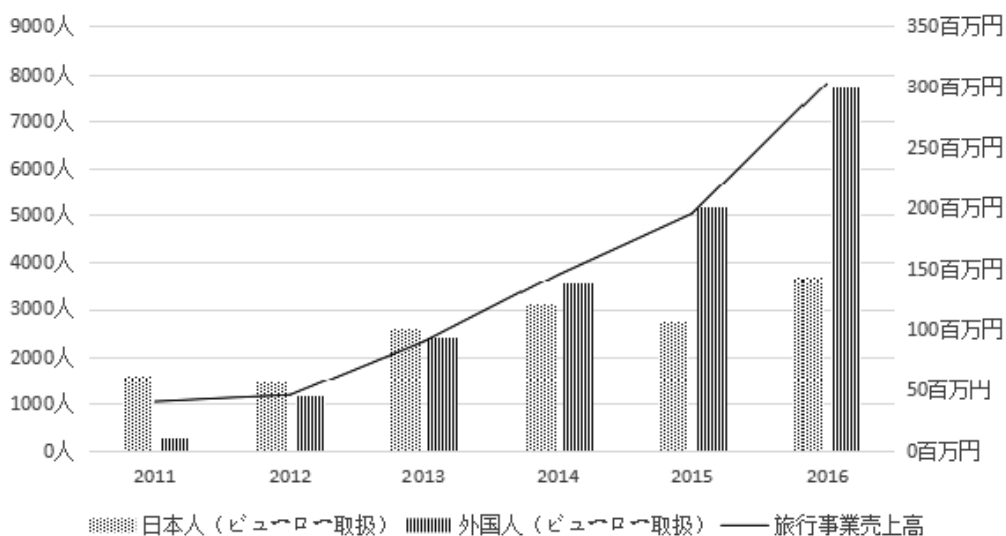


図3 田辺市熊野ツーリズムビューローの旅行業務取扱人数および旅行事業売上高
田辺市熊野ツーリズムビューローの平成29年度社員総合記者発表により作成。

子どもたちを農山漁村での宿泊・交流体験の受け入れ体制の整備を進めるもので、今年度、神納川農山村交流体験協議会がモデル地域の指定を受けました。

近畿子ども農山漁村交流プロジェクト推進協議会が設けている神納川農山村交流体験協議会(かんのがわHBP)の紹介ウェブサイトには、次のように記されている。「地域の人々が行っている実生活を通して、他人への感謝や、思いやりを都会の子どもたちに体験してもらいます。また、郷土料理である唐菜寿司・茶がゆづくりなど、都会ではできない清流での川遊びなど、ありのままの神納川の暮らしを体験できるように知恵を絞っています。十津川に来た思い出に、豊富な木を利用し、一人一人に木作品を作って持ち帰っていただくことなどもできます」。また、協議会の概要として、「自給的農家若しくは林家(5大字住民、内野、山天、三浦、五百瀬、杉清)の有志により構成しており、農作業から山林作業・川遊びをはじめ、受入(宿泊)全般を行う。運営全般は協議会事務局が、体験メニューをはじめ受入時のサポートとして十津川村、大学生ボランティアで構成。地域内の資源を活かした農山村交流体験を通じ、新たな観光振興拠点づくりを目指し、継続可能な運営体系を確立し、地域振興と共に新たな雇用を創出するために設立」と記されている。

愛称である「かんのがわHBP」について、協議会のウェブサイトでは「HBPについて」として次のように説明されている。「Happy Bridge Project ～都市部と過疎地を結ぶ幸せのブリッジプロジェクト～ 情報や物の氾濫、ビジネススピードの加速などにより、人々が自分を見失いがちな『都市部』。反対にあらゆる便利なものと引き換えに、ニッポンの原風景と心が今も残る『過疎地』。『都市部』に暮らす人々には、今、人間としての原点にかえるリセット・リボーンの方が求められています。そんな場所に『過疎地』がなれるのでないか。両者を結び、お互いの幸せにつなげる、奈良県、十津川村、神納川区、じゃらんリサーチセンターの協働事業です」。また、あわせて「とつぷろ。について」の項目もあり、「奈良県十津川村神納川地区をもっと元気にするために、現地の方々と共に様々な活動をしているグループです。大阪大学の学生を中心に構成されています」と記されている。多様な主体の協働でこの動きが作られていったことがわかる。

2008年11月の『村報十津川』では、特集「子ども農山漁村交流プロジェクト事業の取り組み」が6ページにわたって組まれている。その冒頭には、「小学校の閉校から2年 このままでは神納川区がダメになる。住民がひとつとなって 地区の活性化に向けてスタート!」と大書されている。五百瀬小学校(閉校当時児童4人)が130年の歴史に幕を下ろし上野地小学校に統合されたのに伴

う地域の衰退への懸念から、神納川区の有志が廃校の活用を模索し、この動きを開始したという。

これには、小辺路を歩く人から神納川区に宿が欲しいとの声があったことも影響している。大字五百瀬に以前民宿が1軒あったが、家庭の事情で休業していた。神納川区長であった岡田氏が自宅を民宿にし、その横に自動販売機も設置して対応していたが、十分とは言えない状況であった。

2008年4月上旬に住民有志13人が中心となって神納川農山村交流体験協議会を立ち上げ、モデル地域の指定申請の手続きを行い、全国50か所の受入モデル地域のひとつとして奈良県で唯一選定された。その後、夏休みの受け入れに向けて村づくり推進課との打ち合わせや地区での夜間の会議、日赤救急法講習会や食中毒予防の講習会などを行い、奈良県立大学の協力も得て準備を進めた。

最初に受け入れたのは、毎年交流研修で訪れている北海道新十津川町の小中学生28名の1泊2日であった。川遊びや民泊、住民とのふれあいなどを通じて、やればできるという自信を得た。その後、8月に奈良県の高取町立たかむち小学校の5年生49名、および御所市立秋津小学校の5・6年生48名を、それぞれ民泊形式により3泊4日で受け入れた。前者では丸太切りや川での魚つかみ、星空観察などの体験を、後者では小辺路歩きや稲刈りの体験を実施した。村報には「協議会の皆さんの声(感想)」が8名分掲載されている。このうち中南さん(内野)は、「大人びた表情をしたかと思うと、あどけない顔で話しかけてくる子どもたちが2晩、3晩となると可愛くて…、なごり惜しい4日間でした。このプロジェクトに参加できた事を誇りに思います。後から後から届く保護者や子どもたちからの手紙に、まだ余韻を引きずっています」と述べている。

5.2. 子ども農山漁村交流プロジェクトの充実と休止

神納川農山村交流体験協議会(かんのがわHBP)では、子ども農山漁村交流プロジェクトとして2009年に小学校5・6年生を2校(約100人)、2010年にも同様に3校(約130人)、2011年には5年生を2校(約100人)受け入れた(近畿子ども農山漁村交流プロジェクト推進協議会のウェブサイトによる)。これらに参加した世帯の多くは、農家民宿の許可取得へと動いた。聞き取りによると、2009年には10軒の農家民宿が設置された。大字ごとの内訳は、内野3軒、山天2軒、五百瀬が4軒、杉清1軒であった。

また、この間、神納川区ではグリーンツーリズムの環境整備や充実に向けたさまざまな取り組みがおこなわれた。たとえば2008年8月の村報には「7/20 再びワサビ栽培を ワサビ田復旧ボランティア」との記事があり、「『荒れ果てたワサビ田老復旧させよう』と募集した

ボランティアに、6歳から70歳までの村内外の方々約30人が参加し、土砂などの除去作業をしました。このボランティア事業は、十津川村わさび協議会が募集したもので、十津川村の良さを知ってもらうことも兼ねて行われました。作業は、大字内野の奥の谷にある元ワサビ田に入り、ツルハシやトンガなどを使って木の根っこや大きな石など取り除き、再びワサビ栽培ができるよう作業を行いました。参加者たちは、この日の目標達成に喜ぶとともに、山奥の清流や自然のさわやかなクーラーに清々しい表情をしていました」とある。2009年4月の村報には「3/29 節目を迎え達成感 ワサビ田復旧ボランティア」の記事があり、「大字内野地内の元ワサビ田に再びワサビを栽培しようと、昨年7月からツルハシやトンガなどを使って木の根っこや大きな石などを取り除き、ワサビ田が復旧されました。昨年『荒れ果てたワサビ田を復旧させよう』と募集したボランティアに、6歳から82歳までの約30人が村内外から参加し、今回このワサビ田にワサビの苗を植え付けました。このボランティア事業は、十津川村わさび協議会が募集したもので、十津川村の良さを知ってもらうことも兼ねて行われています。参加者たちは、昨年から行われてきた一連の作業の一つ節目を迎え、みんなで喜びを分かち合いました」と記されている。

同じく2009年4月の村報には、「神納川農山村交流体験協議会を支援するため、旧五百瀬小学校職員住宅を農村交流体験者及び受け入れ本部関係者の宿泊施設として利用できるように20年度補正予算で改修することといたしました」とある。これはメゾネットタイプの一棟貸し宿泊施設「Villa かんのがわ」のことである。

2010年3月の村報には、同年1月に、十津川温泉ホテル昴で開催された都市農山漁村交流活性化機構(愛称: まちむら交流きこう)主催の「フォーラム in 十津川村地域の資源を活かした村おこし」が掲載されている。その中で、2008年に神納川区にUターンした後に神納川農山村交流体験協議会の事務局長となった岡田亥早夫氏が、「当初は不安や心配はあったが、地域の方々の理解と協力で実施できた。今では農家民宿の許可取得や、飲食店等許可の取得、またモニターツアーの実施を行うなど、住民が積極的に動き地域に元気を取り戻して来ている」等と述べている。

2011年5月の村報によると、同年3月・4月には村地域雇用創造協議会が、森孝弘氏(通称「北前のおいちゃん」)の案内による旅行プラン「三浦の三狐神さん」の商品化に向けたモニターツアーを実施した。同年5月の村報によると、「昼食用の唐菜寿司(めはり)作り～舟渡橋を渡って、棚田～石畳～北前のおいちゃんのおじいちゃんの家～防風林～三狐神さんお参り・昼食～ロッジ」という小辺路を活用したツアーであった。

マスメディアに取り上げられる機会も増えた。かんのがわHBPのウェブサイトでは、2009年9月から2010年10月にかけて『ファミリーじゃらん』、『ダ・ヴィンチ』、『別冊 旅の手帖』、JAL機内誌『スカイワード』、『田舎暮らしのスズメ』など12誌に掲載された記事が、PDF形式のファイルで公開されている。

このように軌道に乗りつつあった神納川区のグリーンツーリズムを大きく変えたのは、2011年8月の台風12号により発生した「紀伊半島大水害」であった。神納川区では、人的被害はあまりなかったものの、十津川村の他地域とつながる道路が寸断され、五百瀬と山天で大規模な土砂崩れが発生し、神納川の河床が上がるなどの被害が出た。これをきっかけに、子ども農山漁村交流プロジェクトは一時休止状態となった。その要因としては第一に、住民が被災し受け入れの余力が乏しくなったことや、川遊びなどの自然体験が困難になったことが挙げられる。

とはいえ、被災だけが休止の要因ではない。第二に、民泊受け入れ家庭の高齢化が挙げられる。民泊受け入れ経験者は、いずれも「夫婦ともに(あるいは家族の複数名が)健康でないと難しい」と語る。

第三に、文部科学省・農林水産省・総務省の三省の合同の取り組みとして実施されてきた子ども農山漁村交流プロジェクトに対し、文部科学省の予算について事業仕分けによって事業を行わないこととなり、国からの支援額が従来の全額補助から三分の一の補助に減ったことが挙げられる。これによって、子ども農山漁村交流プロジェクトを実施する学校が少なくなった。

これらの結果、現在は大字内野の農家民宿「山本」と大字五百瀬の農家民宿「政所」、そして一棟貸しの「Villa かんのがわ」のみ、宿泊施設としての経営が維持されている。以下では、それらの概要と利用動向を述べる。

5.3. 現行の宿泊施設の概要

5.3.1. 農家民宿「山本」

農家民宿「山本」は、中南太一さん、中南佐栄子さん夫妻により2009年に開設された。かんのがわHBPのウェブサイトには、箇条書きで次のように紹介されている。

- ・調理師免許を持つ佐栄子さんの作る料理は地域の中でも美味!と有名。
- ・小高い山の上に建つ平屋作りの家。
- ・山天地区に沈む夕陽を毎日拝める。
- ・運がよければ庭で飼育する「ウコッケイの卵かけごはん」にであえる。

この民宿では、子ども農山漁村交流プロジェクトが導入されて以降、夏休みの小学生に対応し、他の季節にも「農家民宿」を目的とする観光者を得ていたが、現在は小辺路を歩く人の宿泊が大半である。「山本」の中南佐栄子さんは、「今、民宿のお客さんの80%は小辺路を歩

いてここで宿泊している。熊野古道の世界遺産がなければ、外国人のお客さんもここに来ない」と述べている。

「山本」の宿帳に書かれている、宿泊者のコメントから代表的なものを紹介する。

- ・「初めての民宿の経験です。ドキドキでしたが、とても夜もゆっくりと寝れました。」(沼津市 女性)
- ・「こんにゃく作り、とても楽しかったです。自分でこんにゃく、イモ育てて作ってみたい。」(名古屋市 女性)
- ・「小辺路縦走の途中にこちらの宿に泊めて頂き、美味しいお食事、あたたかいおもてなしで大満足です。快適な一晚を過ごすことができました。」(鎌倉市 女性)
- ・「高野山から歩いて来て疲労がたまっていたところに温かいお風呂に食事をしてとても癒やされました。またいつか来たいと思います」(岡山市 男性)
- ・「本当にリラックスができる場所、おいしい食事でした。熊野古道の巡礼、心から楽しむことができました。日本の素晴らしい一面だと思います。このような民宿での滞在ができてうれしいです。」(アメリカ 男性と女性)

客室は和室が2室、定員が6人であり、「山本」は、この家が代々受け継ぐ屋敷である。施設の周囲は農地や自然に恵まれており、こんにゃく作り、めはり(高菜)寿司作り、十津川ゆうべし作り(ユズの収穫時期)など農業と田舎暮らしを体験できる。



図4 農家民宿「山本」のある大字内野の景観

5.3.2. 農家民宿「政所」

農家民宿「政所(まんどころ)」は小辺路沿いにある。1980年に主屋・表門・棟札が「辻家住宅」として県指定有形文化財になった。主屋は棟札によると1725年の建築で、表門は薬医門形式1853年築とされる(図5)。かんのがわHBPのウェブサイトには、次のように簡条書きで紹介されている。



図5 農家民宿「政所」の薬医門

- ・門前では看板犬「まぐ」がお出迎え。
- ・まき割り・風呂焚き・畑仕事などなんでもお手伝いできるアットホーム感。
- ・元気キャラの「伊久子ネエ」。畑の野菜も元気で美味しい!

辻伊久子さん・辻成晃さんは、2006年にすぐ横の元五百瀬小学校が廃校になったこともあって、人が集まる場所を作りたいと思い、2009年に親子で農家民宿を始めた。

当初は、都市部からの宿泊客は「子ども農山漁村交流プロジェクト」の小学生を含め、農業体験が目的の場合が多かった。しかし、紀伊半島大水害によってそうした宿泊者は減少した。代わって、小辺路を歩く観光者が増え続けている。普段は他の収入源も持っている辻成晃さんは、「90%の観光客は古道を歩いてここで宿泊する。たまに大学生や家族で農家民宿を目的としてここへ来る場合もある」と話している。

「政所」のノートに書かれている、宿泊者のコメントから代表的なものを紹介する。

- ・「おいしいお料理をいただき、記念写真も写して、とても良い思い出になりました、一生忘れない思い出になります。」(50代 女性)
- ・「この政所の食事はとても美味しく、量もたくさん出させていただいて、感動しました。おばあちゃん家に来たような気分でした。」(日本大学 学生)
- ・「豊かな自然に囲まれた環境の中での一泊は、とても貴重な経験でした。おばあちゃんの作る手料理に長旅の疲れが一気に吹っ飛びました!」(20代 学生)
- ・「のどかな自然の中で素敵な暮らしに触れることができ、良い経験になりました。ごはんもおいしくてワンちゃんもかわいく、ぜひもう一回来たいです!」(20代 学生)

「政所」は客室と和室が2室、定員が6人である。薪割り(子どもは薪割り機の体験)、こんにゃく作り、畑仕事などの田舎暮らしが体験できる。

5.3.3. Villa かのがわ

旧五百瀬小学校の職員住宅を改装した、2階建てのメゾネットタイプの2棟の建物を、一棟貸しの宿泊施設にしている。IHコンロや冷蔵庫、電子レンジ等を備えたキッチンが付いており、食事は自炊である。

近くの農家民宿「政所」が満室の場合に使用されることが多い。



図6 Villaかのがわ

5.4. 農家民宿の利用動向

図7～12に、農家民宿「山本」と「政所」の2015年～2017年の宿泊者数とその分布を示す。図7・図8から、宿泊者数には春と秋の2回のピークがあり、冬季は著しく少ないこと、宿泊者数が増加傾向にあること、日本在住者と海外在住者の傾向にあまり違いがないことがわかる。

春と秋は、山歩きに適した季節である。好天が多く、澄んだ青空と、新緑あるいは鮮やかな紅葉を楽しみながら小辺路歩きをする観光者が多い。ただし、ゴールデンウィーク等の休日に集中しすぎることが経営側の負担となっている。

閑散期は、小辺路の峠道が歩きにくい季節である。特に冬季は峠道に雪氷があり危険なため、宿のほうから旅程の変更を提案することもあり、実質的に休業期間となっている。6月に宿泊者が少ないのも、梅雨の影響で天候が不安定で、雨の日は濡れた岩などで登山道が滑りやすくなるためである。

7月・8月は夏休みということもあって、日本在住者の場合は子ども連れの家族が農業体験する場合もある。それ以外の季節の宿泊者の大半は、小辺路歩きを目的としている。特に海外からの宿泊者はほぼ全員がそう

である。

図9・図10からは、日本在住者は全都道府県から訪れていること、多くが大都市圏から訪れておりその数が増えていることがわかる。大都市圏に集中する要因として、農家民宿の経営者らは、マスメディアによる紹介の影響や、自然や田舎へのあこがれを挙げている。なお、北海道からの来訪の多くは、十津川村と新十津川町との交流によるものである。

図11・図12からは、海外在住者の多くがオーストラリアやヨーロッパ西部・中央部、北アメリカ大陸、中国、シンガポールから訪れていることがわかる。特に2017年のオーストラリアの宿泊者は46人を記録し、2015年の倍以上に増加している。越智(2010)は、オーストラリア人の性格・国民性として、自然に囲まれた環境で育っているからアウトドアを好む人が多い傾向にあるという。また、時差が小さいこと、比較的安価に来日できることなども影響している可能性がある。ヨーロッパの中でフランスやスペインが目立つのは、熊野古道と同じく世界遺産登録されているサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼道を歩いた後に、熊野古道を訪れる観光者が多いことに由来している。中国からは、5月と10月に連休を利用して来日する観光者が増えている。香港などの中国の大都市から関西国際空港等へは、飛行機で3時間ほどで行ける距離であり、日本の文化や世界遺産などに魅力を感じた場合に気軽に来訪しやすい。農家民宿に宿泊する中国人は、個人ツアーの富裕層が多い傾向があるという。なお、カンボジアやフィリピンなどの途上国からの来訪の多くは、JICA(国際協力機構)の実施している研修の一環である。

これらの海外在住者の多くは、先述の田辺市熊野ツーリズムビューローを通じて宿泊予約をおこなっている。さらに2016年ごろからは、日本のアルパインツアーサービス株式会社や株式会社ワールドツーリスト、英国の奥ジャパン株式会社、カナダのヤマナスカ・マウンテン・ツアーズ(ワイエム・ツアーズ株式会社)、フランスの株式会社デスティナションジャポンなどを通じた送客もおこなわれている。

大阪大学の学生や卒業生が「かのがわHBP」を通じて関わり続けているなど(測上ほか, 2016)、グリーンツーリズムの受入経験や拠点を有していることが「関係人口」の持続にも寄与している。

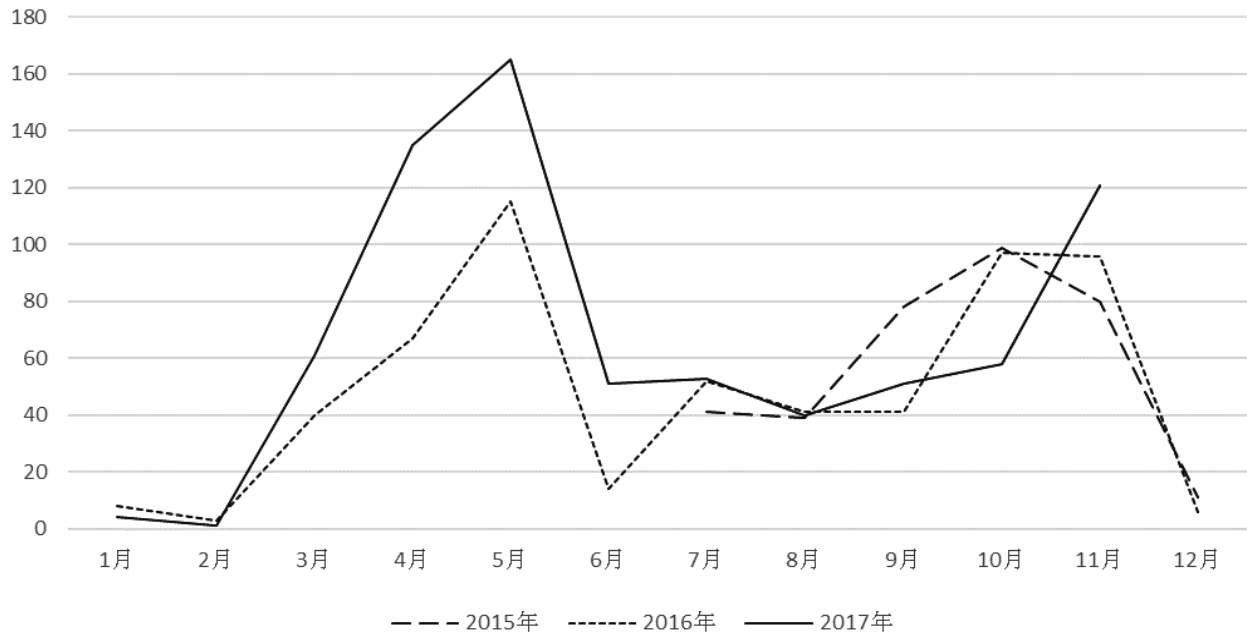


図7 神納川区における農家民宿の宿泊者数(日本在住者)

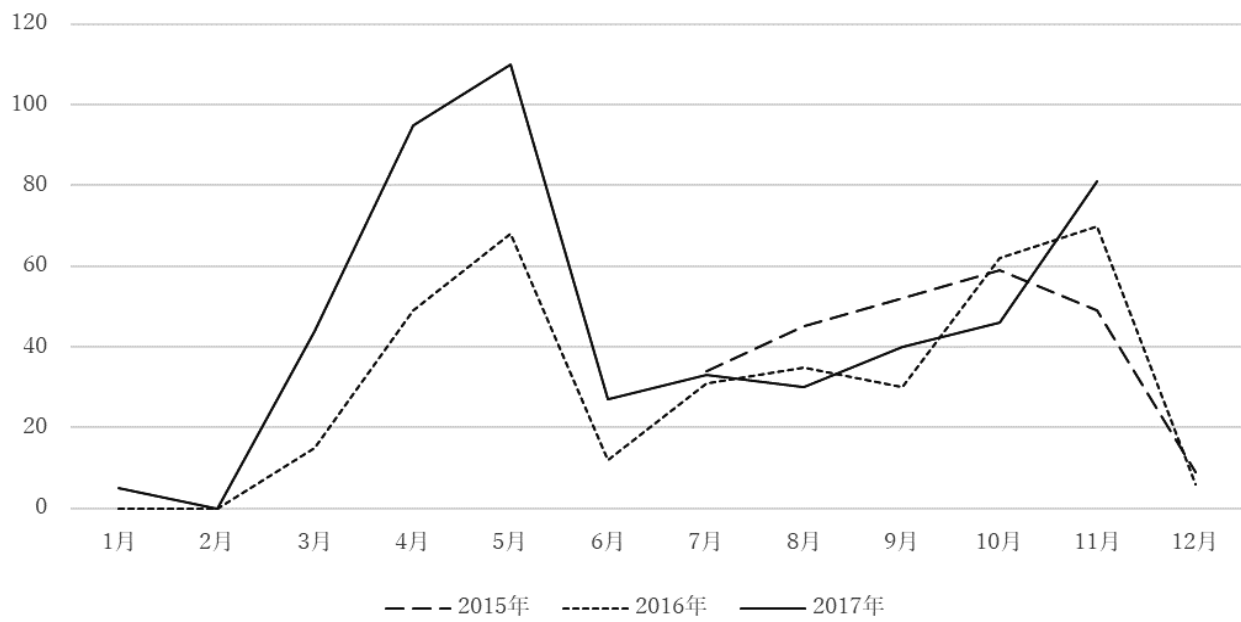


図8 神納川区における農家民宿の宿泊者数(海外在住者)

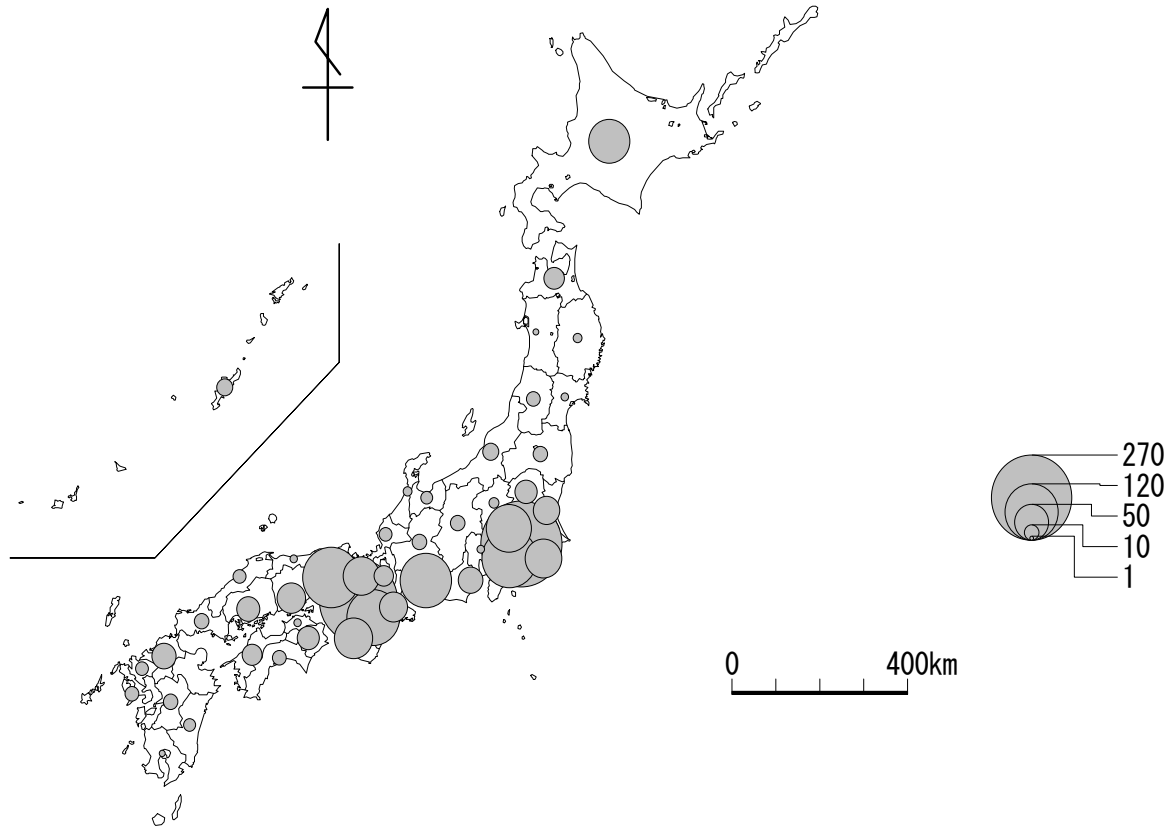


図9 神納川区における農家民宿宿泊者の居住地分布（日本在住者）

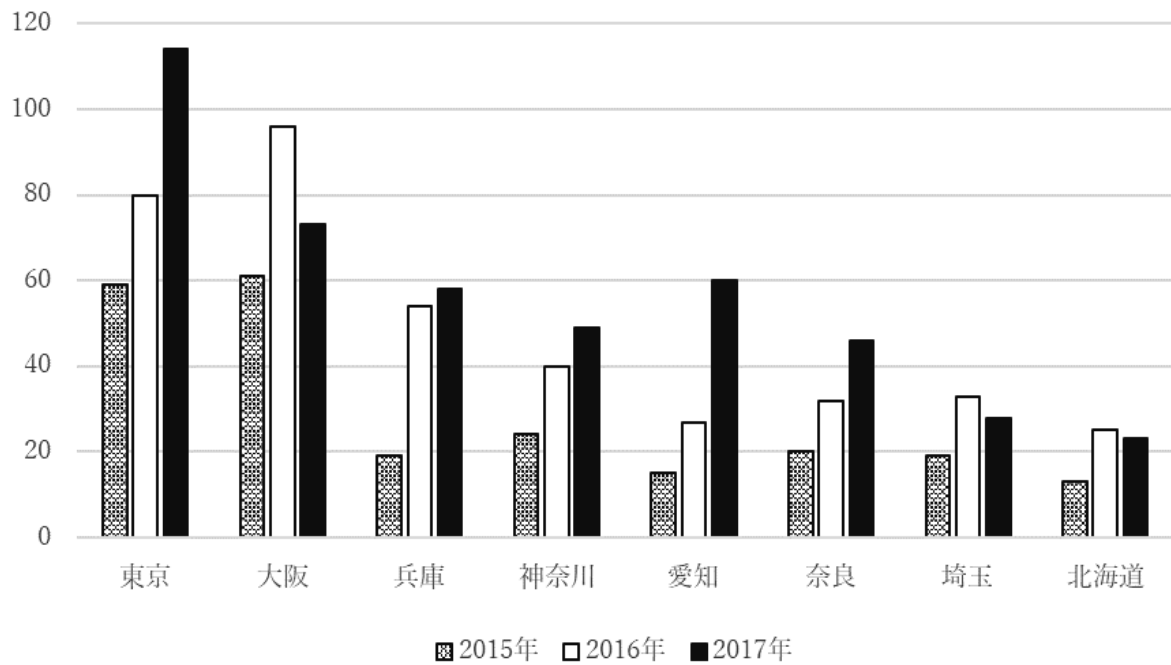


図10 神納川区における農家民宿宿泊者の主な居住都道府県（日本在住者）

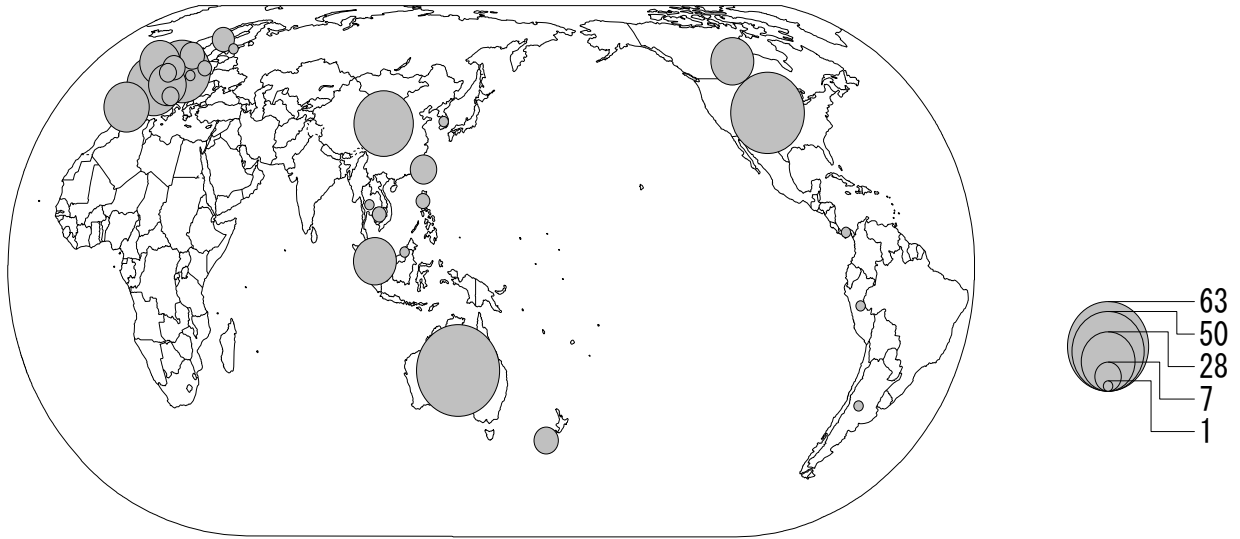


図11 神納川区における農家民宿宿泊者の居住地分布 (海外在住者)

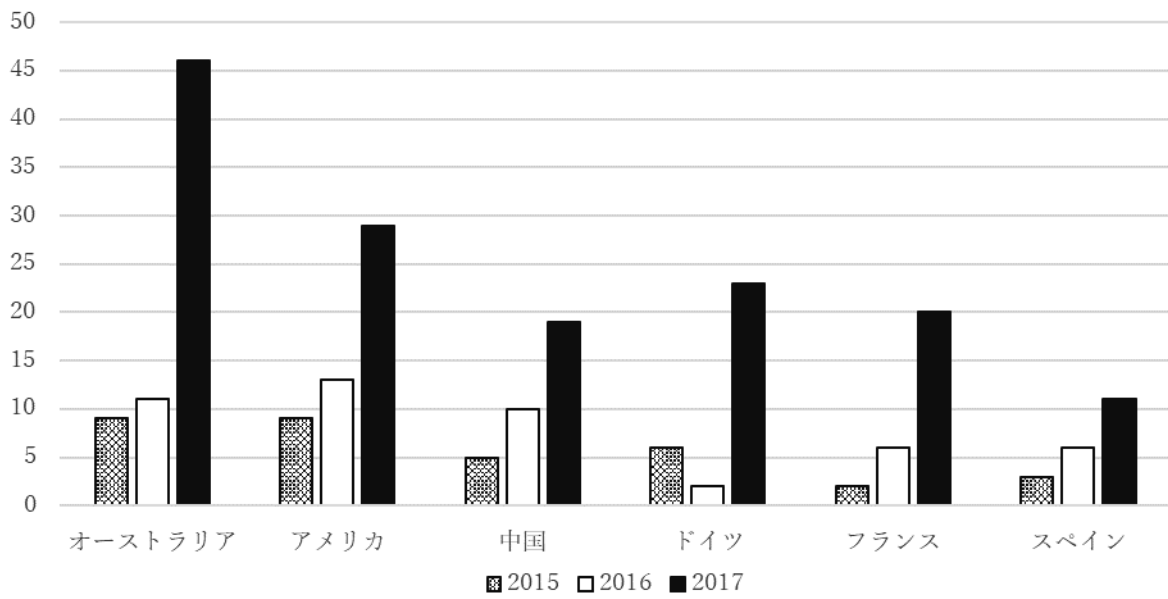


図12 神納川区における農家民宿宿泊者の主な居住国 (海外在住者)

6. おわりに

十津川村神納川区では、2004年以降、世界遺産であるがゆえに小辺路を歩く観光者が現れるようになり、特に外国人の来訪者が増えた。しかし、神納川区には宿泊施設がない状況であった。

一方、これとは別に、グリーンツーリズムの推進施策のひとつであった「子ども農山漁村交流プロジェクト」が2008年に導入され、小学生の農山村体験の受け入れが行われた。しかし、10戸以上あった民泊受け入れ家庭の高齢化や、推進施策の事業仕分け、2011年8月の紀伊半島大水害などの影響で、現在は農家民宿2軒とコテージのみが維持されている。維持の要因は、経営する家族の構成員が複数おり比較的健康であること、他にも収入源があること、観光者との交流に喜びを感じられることである。また、そこには和歌山県の田辺市熊野ツーリズムビューローの動きが大きく影響している。田辺市は、世界遺産登録を契機とし、観光地化を大きく進め、インバウンドツーリズムを取り入れながら急速な発展を促進した。観光客と観光消費額の増加からみると、世界遺産の集客効果と経済効果ははっきりと見られる。神納川区住民は、域外からのツーリズムの動きに対応せざるを得ない状況にある。

とはいえ、これをもって神納川区の主體的なグリーンツーリズムの動きが失敗であったとは決して言えない。村報の2011年12月号に「地域の声」として、「避難所で過ごした方が『神納川HBPで旧五百瀬小学校の施設を使っていたから、そこに避難したときどこに何があるか、また、誰がどの作業を得意とするか、避難したときも全員まとまっていた』と話されたことに日ごろのコミュニティの強さを感じました」とあるように、子ども農山漁村交流プロジェクトを中心としたグリーンツーリズムの経験は地域コミュニティの強化につながっている。また、今後も、世界遺産である熊野古道小辺路を歩く観光者の来訪は続くと考えられる。これらに対応できる宿泊施設の存在や、地域の可視化、観光者に対する住民の理解、地元食材の活用、内外における地域ファンの存在等に、グリーンツーリズム推進の成果が確認できる。グリーンツーリズムの経験は、次なる展開への基盤となっている。

しかし、神納川区の住民の減少、高齢化は著しく、また民宿のみで生計を立てることは難しい。今後は、同区におけるこれまでのツーリズムの経験蓄積を生かし、区外の有志が観光者を対象としたスモールビジネスを複合的生業のひとつとしたり、出身者が区外とつないだスモールビジネスを組み立てたりすることが、神納川区のツーリズムと地域社会の持続可能性を高めることにつながると考えられる。

付記

本研究は、十津川村史編纂事業の一環として、十津川村教育委員会のご協力を得て実施しました。調査に際してお世話になりました民宿「山本」の中南太一さん・中南佐栄子さん、民宿「政所」の辻伊久子さん・辻成晃さん、大字内野総代の伊葉爲利さん、大字山天の松葉俊子さんをはじめとする十津川村神納川区に関係するみなさまに、心よりお礼申し上げます。

本稿の作成にあたり、河本が全体の企画・取りまとめと第1章・第2章・第3章・第6章の執筆を、劉が第5章の執筆と図1の作成を、馬が第4章の執筆をおこないました。現地調査および研究協議は全員でおこないました。

本稿の骨子は、2018年2月20日の十津川村史編さん委員会第2回成果報告会(於：神納川地区生活改善センター)、および2018年3月23日の日本地理学会2018年春季学術大会(於：東京学芸大学)にて発表しました。

引用文献

- 新井直樹(2008)：世界遺産登録と持続可能な観光地づくりに関する一考察。地域政策研究, 11-2, pp.39-55.
- 井上和衛(2011)『グリーンツーリズム 軌跡と課題』筑波書房.
- 越智道雄(2010)『オーストラリアを知るための58章』明石書店.
- かんのがわ HBPウェブサイト
<<http://www.kannogawa.com/>> (2018年5月5日最終閲覧)
- 栗栖祐子(2011)：日本のグリーン・ツーリズム研究の動向と今。林業経済研究, 57(1), pp.37-48.
- 河本大地(2014)：「都市農村交流」を中心としてきた日本のグリーンツーリズムの課題とあり方—農村地域の未来可能性を高めるために—。神戸夙川学院大学観光文化学部紀要, 5, pp.64-72.
- 多田稔子(2011)：サステイナブルツーリズムをめざして—世界に向けた田辺の挑戦—。21世紀わかやま, 66, p.18
- 十津川村(2014)：『紀伊半島大水害』十津川村.
- 服藤圭二(2005)：世界遺産登録による経済波及効果の分析—「四国八十八ヶ所」を事例として—。えひめ地域政策研究センター「ECPR 2005」, 1, pp.45-51.
- 藤代直希(2012)：世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」における文化的景観と林業—熊野古道・中辺路ルートを事例として—。森林研究, 78, pp.1-10.
- 淵上ゆかり・上須道徳・栗本修滋・原圭史郎(2016)：学際融合科目「サステイナビリティDラボ」の実践—学際的共同を主体にしたPBL(Problem Based Learning)。公益社団法人日本工学教育協会 平成28年度工学教育研究講演会講演論文集, pp.520-521

